

会員動向 平成22年度、目標は500名！

平成21年度の期末会員数は450名となり、年度間目標を100%達成しました。地区的に見ますと、昨年度は特に「東海中部」や「近畿」地区の入会が活発で、目標達成に大いに寄与しました。また、期末3月には「青葉都筑」からの入会が目立ち、目標達成を確実にすることができました。さて、平成22年度は、スコール30周年記念の年でもあり、区切りとなる期末会員数500名を是非達成したいと思えます。今年度は地区的には「北関東」があと9名、「京浜」があと4名純増すると、各地区会員数100名が実現します。これに続く「八王子多摩」も14名増で大台超えとなります。全国的な勧誘運動を通して是非500名、早期の達成を目指して頑張りましょう。

Webmasterより

上記のとおり、平成21年度の期末会員数は450名となりました。お陰様で、メールニュース登録数（アカウント数）も150となり、全体の約33%の方が登録しています。家庭においても、インターネットやメールの利用が日常的になっていると思いますが、もっとたくさんの方にアドレス登録していただけたら、と思っております。マスターズ・ブログやホームページについても、より多くの方からのご利用をお待ちしております。是非、アクセスをお願いします。ブログへのコメント、メールフォームからのご意見、大歓迎です。メールニュース未登録の方も、是非この機会をお願いします！

メールニュース会員の登録は簡単

webmaster@schole-masters.org 宛、お名前、地区名を記載の上、メールをお送りください。（PCメールのみに対応）詳しい活動内容は、マスターズホームページへ！！

スコール マスターズ

当面の行事予定

- 6月12-13日 マスターズ年次総会&研修
(箱根湯本ホテル)
- 7月 4日 「心身開発コース」(スコール会館3階)
- 7月17日 首都圏「人生学講座」
(スコール会館ホール)
- 8月 1日 「心身開発コース」(スコール会館3階)
- 8月22日 「人生学コース」(スコール会館ホール)
- 9月 5日 「心身開発コース」(スコール会館3階)
- 9月12日 「人生学コース」(スコール会館ホール)

青朱白玄
春夏秋冬

テレビ、雑誌などの取材を受け、そのことが放送、誌面などに掲載された時、発言した本人の意思とは別の形になっていたという話をよく聞く。企画編集者の意図によってそうなるのであろうが、発言者は結果的に筋書きのあるドラマに乗せられたことになる。

また皆さんもご自分の専門分野の事がメディアに流れたとき、その内容について「おや」と思われたことが今までに何度かあったのではないのでしょうか。知らない者と分からない者が集まるととんでもない方向に行ってしまうと先輩からよく聞かされてきたが、電波に流れたり、活字になってしまうと全てが真実に思えてくる。見てきて嘘を言うということがひょっとしてあるのかもしれない、いつのまにか筋書きのあるドラマに乗せられてしまうことになる。肩にツバとまではいかないにしても、こちらもその内容についてある程度見識をもって見聞きする必要があります。

昨年来行われている立法院の一部と民間有識者が行政等に対し、従来行ってきた事業等についている質問しているが、結論の部分はまさに筋書きのあるドラマを見せられているような気がする。それはそれとして、その中で「二番目ではだめなのか」の発言を聞いて、技術、匠の国であるわが国から優秀な頭脳、技術が海外に多く流れたのではないかと非常に気になった。(梶田 健二)

編集後記 時々、インターネットで買い物をするのですが、驚くのは届くまでの時間です。早ければ、当日のうちに、遅くとも翌日には届きます。「早さ」は価値となり、私たちの生活は常にスピードを求め、また、求められる傾向にあるようです。振り返ってみますと、今までの人生、「早く、早く...」とせきたて、せきたてられ、常に結果を焦りながら生きてきたように思います。スコールに入会して4年が経ち、学ばずでの心構えが大切だと思ふようになりました。「スコール」という言葉の意味を味わいながら、スコールでは、焦って結果を求める学びより、気が付いたら結果の出ている学びがしたいと思う次第です。3年間、マスターズ通信の編集に携わる機会をいただきました。元来、人の言うことを聞けない性格ですが、皆さまの原稿と向き合いながら、感ずるところがたくさんあり、大変勉強になりました。どうもありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。(白石 英樹)

編集：社団法人 スコール家庭教育振興協会
スコール・マスターズ 広報委員会
発行人：小俣富雄
〒252-0206 相模原市中央区淵野辺4-37-17
TEL：042-707-4500
http://www.schole-masters.org

スコール・マスターズ通信

第38号
平成22年6月1日

マスターズ会員が、集う！語る！体験する！ 各地で開催された懇親会の模様を報告します

お陰様でマスターズの会員数も順調に増え、22年3月末日で450名となりました(詳細は4ページ参照)。会員数の増加に伴い、各地区でそれぞれに懇親会が開催されています。最近、開催された懇親会について報告を得ましたので以下に掲載します。

【京浜：城南ブロック懇親会】

昨年の9月26日、等々力の早期研修に参加される次の方々に懇親会を開催。南部光敏、栗山榮治、日下部康司、関野昇、渡部潔、岡本一誠の各氏が自由が丘の「焼き物料理屋」に集いました。まずは日頃の奥方の努力に敬意を払うと共に感謝をして「乾杯」。



スコールの会の意義などを論議しました。

【京浜：川崎ブロック新年会】

1月17日、川崎ブロック・マスターズ会員の新年会を開催。兼子知夫、岡 義明、石川和彦、三橋克興の諸氏が参加。マスターズの仲間の懇親を深め、それぞれ自分の置かれている現状や今後の抱負を語り合いました。

投稿コーナー

家族との時間を大切に
町田相模ブロック 萩原 和之

半導体の製造の新技术を開発するベンチャー企業の日本支社に転職してから2年が経ちました。米国の本社と合わせて20名程度の小所帯です。以前は電子機器関係のソフトウェア会社で中間管理職をしていましたが、私には小規模な会社で新製品のアイデアを考える方が向いていると考え、25年お世話になった会社から移ることにしました。私は新技术を取り入れたソフトウェア製品の営業支援のために、プログラムの評価や、顧客向けの資料作成、開発提案をおこなっています。

就職先を決める時に、一つ心配なことがありました。私はこれを機に、家族と過ごす時間をもう少し多く取りたいと考え、従業員の残業の状況について尋ねたのですが、「集計していないのでわからない」という回答だったのです。ところが実際に入社してみると、業務の内容や期限は上司と

【近畿：大阪・兵庫ブロック懇親会】
3月22日、細見周造、平田保則、井尻弘孝の3氏が参加。参加者数は少なかったのですが、ブロック懇親会開催の呼びかけを契機に6名のマスターズ会員の加入をいただきました。マスターズの行動規範について細見氏からお話があり、さらに「おとうさんの10ヶ条」を確認。それぞれの生い立ちや川上貴光氏の「からだ曼荼羅」を話題に盛り上がりしました。

【東海地区交流会】

毎年、マスターズでハイキングを実施していますが、今年は趣向を変え、「親子で春を探そう」と題して、里山の観察と整備作業の体験を試みました。4月17日、30人が4班に分かれ、文殊の森で春を探し、森の整備事業を体験しました。(当日の様子は次頁の投稿欄で紹介しています)

【新年度マスターズ応援者会議】

新年度のマスターズ活動を一層充実させるため、新たな応援者に手を貸していただくこととなりました。4月18日に、菊地啓、渡部潔、原健一、白石英樹の各氏と小俣マスターズ代表幹事、金井事務局長、大島尚、藤田和弘事務局長、小川健次本部長で顔合わせの会議を開催。今後の活動の内容について打合わせを行いました。

話し合ってから決められるので、周りの目を気にした残業はほとんどありません。お蔭で週に数回は家族と一緒に夕食を楽しめるようになりました。他方で技術には人に負けない自信があったので、すぐに認められるものと楽観していましたが、しかし入社しばらくは、通常の難易度のプログラムを仕上げても出来てあたりまえ、技術改良の提案をしても今ひとつと評価され採用されない、など我慢の日が続きました。その後、顧客から与えられた、やや難しい課題に対し、解釈と解決策を私なりに考案して作業も仕上げるという機会がありました。その結果を持ち本社社長に同行して訪問した際、その場で顧客の好評価を得ることができ、以後徐々に私の技術を認めてもらうことができました。いまでは先輩社員と対等に冗談を交わすこともしばしばです。

転職すると通勤や仕事など変化が多いですが、その一つ一つを前向きに受けとめ、対処できているのは、スコールで学んだおかげと感謝しています。これからも、現在の職に巡り合えたことへの感謝を忘れず、新技术開発は世のために必要な私の役目と考え、仕事にも励みつつ、温かな家庭を築いていきたいと思えます。

投稿コーナー

親子で里山観察と整備作業体験

東海中部地区 小川 泰典

岐阜のスコールマスターズでは、親子で春を感じようとして毎年ハイキングを実施していましたが、今年は趣を変えて首題の体験活動を企画しましたので、この活動の報告をいたします。

場所は文殊の森公園という所で、前日まで雨がたくさん降っていましたが、当日はその雨も上がり爽やかな日になりました。スタッフで打ち合わせの後、林内の下見をしましたが、前日の雨にもかかわらず足元は少しもぬかるんでいるということもなく、改めて里山の持つ力に驚きました。

林の中はハイキングコースとは異なり人が一人通れるほどの余裕がなく、ひとつ間違えば転がり落ちそうな所でした。そんな道の途中に獣道があり、イノシシの足跡がありました。さらに奥に行くとき少し開けた所があり誰かが耕したようになっていて、それがイノシシの掘り返した跡だということでした。

予定の時間が来て30人くらいの親子が集まり、そのうち半数が子供達で中には小さな子もいました。林の途中の道の状態を考えると心配もしましたが、文殊の森里山クラブのボランティアの皆さんの協力を得ることにより支障なく実施することが出来ました。

四つのグループに分かれ、里山クラブで用意して

生涯の学びの場

京滋ブロック 樽見 潤一

ある時、妻と一緒に母親講座を聴講させていただきました。その中で妻が突然指名され夫である私の長所を発表しました。

急なことにもかかわらず的確に述べる妻を目の当たりにして感動を覚えました。

自分でもなかなか思い出せないことを良く見ていると思ったのはもちろんのこと、それをすらすらと言葉に出せるのはすごいと思いました。

思えば、私の周りにも自分の子供をはじめ、近所の子供たちや職場の人々など多くの人たちがいます。

特に職場の後輩に対して思えば、不満や欠点は良く気づくのですが長所といわれるとなんとなくはわかっていてもサッと言葉に出せないということに気づきました。

そして、私から見ても不満の多い後輩の話をよく聞くと、小さいころ親と死別していたり親から褒められたこともなく、「あんなんか生まれてこないほうが良かった」と言われたことしか記

いただいた手ノコ、剪定バサミ、ヘルメットを付けていよいよ出発です。まずは里山観察ですが、『里山クラブ』の方から身近な草木の名前や特徴を教えてください、みんなで観察し今まで見過ごしていた草木の不思議さに感動しました。

また途中にはホダ木からシイタケが出ていたり、スミの花が一輪咲いていたり、里山の自然を満喫しながら進み、次は里山の整備作業体験の間伐作業をみんなでいきます。

どんな木を切るのかというと、成長の早い常緑樹で5センチくらいの太さの木です。『里山クラブ』の方から作業の仕方を教えていただき、木を切りそれからその木の枝を剪定バサミで子供たちと一緒に切りました。



この作業をしているときウグイスが近くまで来て鳴き始めたり、また違うグループではイノシシと遭遇したりと里山ならではの体験を子供たちとすることが出来ました。

この体験は私自身にとっても有意義なもので、これに参加した子供たちは本当に生き生きとして、今も昔も子供というものは輝いているということを実感しました。みなさんも親子で共有できる体験を通してさらに絆を深めてください。

憶に無かったり、親から欠点ばかり指摘されて育っていたり、親からの愛情を受けていない(そう思い込んでいる)人が多いのです。

時には良く思えないときがある人でも、そんな事情があるのかと思うと、結婚して幸せな家庭を作ってほしいと思わずにはられません。

私自身が人を褒めることが苦手なのですが、そんな後輩の長所をよくみて言葉をかけ、お互いに向上していけたらよいなと思います。



スコールに入会させていただき、私自身はまだ取り組んでいることがあるわけではなく、時々本を読ませていただく程度ですが、これからは生涯の学びの場として学ばせていただき器が大きく社会に貢献できる人間にならせていただきたいと思います。

連載

進むべき道・運命は変えられる

青葉都筑ブロック 桑折 能彦

JICAからネパールへ

私は1945年(昭和20年)12月25日、相馬盆唄や相馬野馬追祭で知られる福島県の太平洋に面した鹿島町(現在は平成の合併により「南相馬市鹿島区」となる)で7人兄弟(2人の姉、3人の兄、1人の妹)の6番目として生まれ、現在64歳になります。リタイア後の2007年から2年間JICA(国際協力機構)のシニアボランティアとしてネパールで『地震防災対策』に従事しました。過日、今度は南米で火山防災の『危機管理』業務の募集がありましたので、早速応募したところ健康に問題があり不合格となりました。やはり『自己管理』が出来ない人に『危機管理』は任せられないのは当然であると自分で納得し、現在は適度な運動、バランスのとれた食事、メリハリのある日常生活を実行し、次のチャンスを備えています。

遠く離れた子を思う母の心

福島県は阿武隈山脈と奥羽山脈によって3分割され、太平洋に沿った「浜通り」、行政・商業中心の福島市・郡山市のある「中通り」、そして白虎隊で知られる「会津地方」となって、それぞれの気候、風土、県民性も異なります。両親は小学校の教師でしたが、二人とも既に亡くなって30数年が経ちます。母は私が中近東のクウェート国に勤務していた時に、教え子の結婚式に招かれその席でクモ膜下出血で亡くなりました。母は遠く離れた地で働く私をいつも心配していたことを後になって兄弟たちから聞きました。

母の子供を思う心は色々な詩歌に詠われていますが、会津出身の野口英世博士の母シカの手紙は最高であると思います。おそらくチビた鉛筆で一字一字確かめながら書いたであろう息子への手紙は野口記念館に原文が保存されているそうです。すなわち『おまゝの。しせ(出世)にわ。みなたまけました。わたくしもよろこんでをります。……わたくしも、こころぼそくあります。ドかはやく。きてください。はやくきてください。いしょ(一生)のたのみて。あります。……いつくるト。おせ(教えて)てくださ。これのへんち(返事)まちてをります。ねてもねむれません。』というものです。

人生にリタイアは無し

一方、是非紹介したい最近の「浜通り」出身の人としては松岡佑さんがいます。過日、NHKのラジオを聴いていたら全世界で4億5千万部も売れた「ハリポッター」の日本語訳(2千4百万部販売)を書いた人であることを知

りました。南相馬市出身で私より2~3歳上で「ハリポッター」の日本語訳だけでも10年以上の長期にわたる大仕事を成しとげると同時に、亡き夫の出版業を引き継ぎ、また夫が長く取り組んできたALS(筋萎縮性難病)の支援活動事業を進展させています。人生にリタイアは無いと楽しみながら人生を送っているのだそうです。スコールで60~70才はまだ青二才ということ学びました。人生はこれからであることを実感するのです。「中高年、登りきってもいけないのもう下り坂」は痛烈な風刺のようです。

スコールとの出会い

私がスコールを知ったのはカミさんを介してでした。「マスターズ」の前身「ミドルメンバーズ」の時代でした。それまでは私は新聞社のカルチャースクールや企業が主催する講演会・シンポジウムに参加するのが好きでした。自分の仕事以外分野のお話は参考になったのですが、カミさんが他人の話聞くよりも、実践よ!、実践を伴わないものは意味が無いのよ!と「トリ年」生まれが「イノシシ年」に導かれたのです。そこでは父親、家族、社会人としてのあり方、思考法、問題解決法を自分の目線で学ぶことができ大変感謝しています。

人生の進むべき道の選択のきっかけは各人各様であると思います。後で考えるとああすれば良かった、こうすれば良かったと反省することがありますが、その時点、時点であながい人はそれぞれ賢明な判断をしているのではないのでしょうか。たとえその判断が間違っていたなら後で修正すればよいと思います。印象にのこる言葉に宿命(男であるとか女である)は変えられないが運命はかえられるということをスコールで学びました。運命はその人の人格如何によってもたらされ、その人格は良い習慣から形成されるということです。

進む道を決めた十勝沖地震

私の場合の道の選択は、1968年(昭和43年)5月16日に起きた十勝沖地震(M=7.9)がきっかけです。過去いくつかの「十勝沖地震」がありますが、1968年の地震では「函館大学」の校舎が無残な姿で鉄筋が生煮えの乾麺のように折れ曲がった写真を思い出される方もいると思います。

当時私は耐震建築を勉強しておりました。卒論の指導教授に約1週間の被害調査に誘われたのですが、旅費、宿泊費、等々の費用のことを考えると躊躇したのです。が兄弟、教授の資金的協力を得て調査に加わることができました。そのことでより先生との関係も深まり耐震、地震防災問題に関わるきっかけとなったのです。さらに、卒業してから約30年後、2002年のサッカーのワールドカップの決勝戦会場となった7万人収容の「横浜国際総合競技場(現日産スタジアム)」の建設で先生が構造検討委員会委員長、私とその事務局長として一緒に仕事をする事になりました。(つづく)

人生学講座